

# 愛知県立大学国際関係学科 「プロジェクト型演習」実践報告

—2018～2020年度の3か年の取り組み事例—

亀井伸孝・福岡千珠・東 弘子・半谷史郎・  
高阪香津美・佐藤良子(内田良子)・宮谷敦美

## 第1節 はじめに

本論は、愛知県立大学外国語学部国際関係学科2～3年次配当専門科目「プロジェクト型演習」の、2018年度から2020年度の3年度における教育実践内容を記録し、その教育や社会貢献などの各側面における効果や達成を検証するとともに、今後のための課題を検討することを目的とする。本論の共著者は、上記の3年度の間、同科目を1回以上担当した教員である。

同科目は、2014年度に導入された同学科の新カリキュラム導入とともに、新たに設置されることとなった。2014年度入学生が2年次に進級した2015年度の後期に、初めて実際に授業として開講された。以来、毎年度の後期に開講され、本論執筆時点の2021年度で7年度目の開講となる。

初回の開講から3年が経過した2018年度に、それまでの授業実践の記録と評価を目的として、2015年度から2017年度の3年度の間同科目を担当した教員全員による共著論文を作成し、本誌に投稿した(亀井ほか, 2019)。それから約3年経ち、状況の変化も踏まえた上で、前回に続く3年度に関する同様の記録と評価を目的として、本論の執筆が企画された。

本論では、まず記録対象となる3年度の全体的な概要と履修状況を示す。次いで、各クラスで実際に行われたプロジェクトの内容を、各授業担当者の文責により紹介する。最後に、全体としての達成と課題をまとめる。

執筆分担については、全体企画、編集、最初の総論と最後の結語の執筆を亀井が、各プロジェクトの具体的な紹介を各担当教員が担当した。最終稿の確認は、執筆者全員で行った。

## 第2節 「プロジェクト型演習」の概要と2018～2020年度の状況

### 1. 「プロジェクト型演習」の概要

「プロジェクト型演習」の理念と導入の経緯については、すでに刊行済みの論文で紹介したため（亀井ほか，2019）、詳細については割愛する。

表1は、2020年度の同科目の共通シラバスの一部である。手を動かし、コンテンツなどを創作しながら、研究技法を学ぶという共通の目標がある。具体的にどのような活動を行い、何の技法を習得するかについては、各担当教員の得意な技能を活かして設定するため、クラスにより授業内容がまったく異なる。このため、例年7月頃に事前説明会を行い、学生の履修希望届を集めた上で、クラス配属を決定する。定員を超えた場合は、抽選などで履修者を決める。授業は基本的にそれぞれのクラスごとに行われるが、学期末に合同発表会を開催し、相互に成果を紹介し合うこととしている。

表1 「プロジェクト型演習」の目標、概要など

【講義題目】手を動かして学ぶ研究の技法

【到達目標】大学での学びには、座学のみならず、自らの手を動かしながらコンテンツを創作することも含まれる。本授業の共通の目的は、「手を動かしながら学び、各自の将来の研究につなげる」ことである。具体的な達成目標は、各プロジェクトが指定する。

【授業概要】プロジェクト型演習のクラスはA～Dの四つが用意されている。いずれも「手を動かしながら学び、各自の将来の研究につなげる」ために、各プロジェクトでは最終的なコンテンツ創作目標課題が設定される。それに向けた、各自の調査や学外活動、課題、発表などに取り組む。具体的な内容は、プロジェクトごとに大きく異なる。各プロジェクトの最終成果については、合同発表会で共有する。

出典：2020年度同科目シラバスより抜粋

### 2. 2018～2020年度の開講と履修の状況

本論において記録の対象とする2018年度から2020年度の3年度においては、各年度に4～5クラス開講され、合計でのべ13クラスが開講された。クラスの設置状況と履修者数を、表2にまとめた。また、それぞれのクラスで実施されたプロジェクトのテーマを、表3にまとめた。

2020年度の履修者数は、前年度入学者数に比べて少ないという特徴がある。理由のひとつが、以下に述べる「同科目を学科の必修科目から外し

た」という措置である。また、感染症の影響も関連している可能性がある。

表2 各プロジェクト（クラス）の年度別履修者数（単位：人）

プロジェクトの番号と担当教員	2018年度 (4クラス)	2019年度 (5クラス)	2020年度 (4クラス)	履修者計	各プロジェクト 平均履修者数
(1) 亀井伸孝	16	12	9	37	12.3
(2) 東弘子	8	14	10	32	10.7
(3) 宮谷敦美	21	-	14	35	17.5
(4) 高阪香津美	11	-	-	11	11
(5) 福岡千珠	-	6	-	6	6
(6) 佐藤良子 (内田良子)	-	13	-	13	13
(7) 半谷史郎	-	14	18	32	16
履修者計	56	59	51	166	12.8
各年度 平均履修者数	14	11.8	12.8	12.8	12.8
前年度入学者数	58	57	61		

出典：愛知県立大学学務課提供情報。「-」は不開講の年度。小数点以下2桁目を四捨五入した。開講はいずれも各年度の後期（半年間、15回）。「プロジェクト型演習」は2～3年次配当科目であるため、おもな履修者層として前年度の入学者が想定されている。留学や時間割の都合を理由に、3年次に履修することを選ぶ学生もおり、必ずしも総数は一致しない。

表3 各プロジェクト（クラス）のテーマ、担当教員、開講年度

プロジェクト(1)「写真・映像による調査と表現」(亀井伸孝, 2018, 2019, 2020年度開講)
プロジェクト(2)「他文化を知る／自文化を知る：インドネシア人介護福祉士候補者との交流」および「東海大学(台湾)とのオンライン交流と協働作業：外国人労働者の調査と意見交換」(東弘子, 2018, 2019, 2020年度開講)
プロジェクト(3)「あいち Ambassador プロジェクト」(宮谷敦美, 2018, 2020年度開講)
プロジェクト(4)「ワンピースプロジェクト(2)：県大を支える人々の魅力を発信する」(高阪香津美, 2018年度開講)
プロジェクト(5)「ライフストーリー・インタビュー」(福岡千珠, 2019年度開講)
プロジェクト(6)「多文化共生とコミュニティ」(佐藤良子(内田良子), 2019年度開講)
プロジェクト(7)「新聞記事のスクラップ」(半谷史郎, 2019, 2020年度開講)

出典：2018～2020年度同科目シラバスに基づきつつ、各担当講師が加筆修正。なお、プロジェクト番号(1)～(7)は、本論における便宜上の通し番号であり、開講年度当時はプロジェクトA、B、Cなどの名称が振られた。

### 3. 例年と異なる2020年度の特徴

2020年度は、二つの点で例年と異なる特徴がある。一つ目は、学科が指定する必修科目ではなくなったことである。当初のカリキュラムでは必修科目との位置付けがなされ、それでおおむね順調に推移してきた。一方、同科目はフィールドワークやグループワーク、社会貢献活動や多彩なアウトプットを伴うユニークな特性をそなえている。本学科の特色を示す科目である一方で、その種のアクティビティを苦手とする学生もいる可能性がある。同科目の単位不足ゆえに卒業に支障が生じた例は過去にはなかったものの、必修科目としての縛りをかけることで、将来に渡って多彩な学生の受け入れや送り出しに支障が生じる可能性に関する議論が学科内でなされた。

こうしたことを念頭に、若干のカリキュラム改訂が行われ、2019年度入学者からは、必修ではなく2単位を取得できる選択科目との位置付けに変更された。もっとも、2年次後期には演習科目がなく、また、それまで同科目の担当教員がクラス担任の役割を併せもつことが多かったことから、必修ではなくなった2020年度の事前説明会においても、「必修ではないものの原則として履修するように」との指導を行った。最終的に履修するかどうかについては、各学生の自由意志によることとした。

二つ目は、新型コロナウイルス感染症の流行がもたらした影響である。2020年の春頃から、日本を含め世界中で猛威を振るい始めた同感染症の影響で、本学も授業の方法に関して対応に迫られた。本学科においても、2020年度前期は全面的にインターネットを活用した遠隔授業の体制となった。

後期は、毎週火曜日1日のみの対面授業が開始され、同科目も火曜5限目に開講されていたため、対面授業の対象となった。一方、2020年12月頃には再び感染症流行状況が悪化し、翌年1月には愛知県でも緊急事態宣言が発出され、再び全面的な遠隔授業の体制に戻ることとなった。各種のアクティビティを含む本科目では、通常授業とは異なる特有の対応を行うことが求められた。本論では、その時期を含む記録を作成することにより、感染症流行状況における実習系科目の工夫のあり方の例を示している。

次節では、各クラスのプロジェクトを担当した教員による、授業の目的や計画、実施状況、達成、課題などを、具体的な記録とともに紹介していく。

### 第3節 各プロジェクトの実践事例紹介

#### 1. プロジェクト(1)「写真・映像による調査と表現」(亀井伸孝)

##### (1) プロジェクトの目的と計画

本プロジェクトは、写真と映像を用いたフィールドワークの実施と、それぞれのコンテンツの制作、公開を目的としている。

2015年度の「プロジェクト型演習」新科目開講時から実施しており、2017年度の担当教員不在(長期学外研究)に伴う1年度の閉講を除き、毎年開講されている<sup>1)</sup>。2018～2020年度も、3年度連続して開講された。

半期の実施計画は、おおむね以下の通りである。前半の10～11月に、写真撮影と自身による写真パネル制作、そして学内外での写真展の開催をする。次いで、11月中旬から映像制作の実習に取り掛かる。映像制作と調査の倫理について学び、映像企画書を作成、ビデオカメラでの撮影とPCを用いた映像編集の実技実習を行う。これらの準備をふまえて、2人1組となって学外での自由撮影を実施する。さらに、1か月ほどかけて、授業内での合評を重ねつつ編集と修正を行い、1月末または2月初めに最終映像上映会を行う。3年度ともほぼ同様の計画のもとで、本プロジェクトを遂行した。

2016年度までの実施とは異なるこの3年度の特徴は、「学外での公開写真展を毎年定例開催するようになったこと」<sup>2)</sup>、そして2020年度からは「学外での写真撮影会を授業に含めるようになったこと」である。

##### (2) 授業の実施状況と成果

成果の公開方法の点で異なる点があり、以下、年度ごとに状況を記す。

##### (2)-1 2018年度の実践内容

2018年度は、16名の受講があった。写真展は、イオンモール長久手のフロアを借りて実施した。「愛知県とイオン株式会社との連携と協力に関する包括協定」に基づき、愛知県関係の事業のために、イオンが店舗内の場所を無償で貸し出すという枠組みがあり、その事業に申請して許可を得たものである<sup>3)</sup>。国際関係学科設立10年記念パーティ(2018年11月3日、愛知県立大学長久手キャンパス生協食堂にて開催)のサイドイベントと位置付けたこともあって、多くの卒業生たちの出展もあった。その後、本学

長久手キャンパスに移設し、学内展示を行った。この取り組みは、やがて長久手市国際交流協会からの依頼により、同協会主催行事「国際交流フェスタ in ながくて2019：ひろめてふかめる多文化共生」(2019年3月3日、長久手市文化の家)において出張展示を行うという地域貢献活動にもつながった。

映像制作については、外部講師を招聘して撮影実習を行い、学生2人1組のグループによる自由撮影活動、編集、授業内での合評会をふまえた修正などを通じて、16名、8グループによる8作品が完成し、最終上映会を行った。この年度の苦労としては、従来の実習で用いていた動画編集ソフト Windows Liveムービーメーカーのサポートが、2017年1月に終了してしまったため、代替の手段として VideoPad を使用し始めたことである。その動作を確認し、使い慣れるまで、教員としても苦労を重ねる面があった。

#### (2)-2 2019年度の実践内容

2019年度は、12名の受講があった。写真展は、東京霞が関の文部科学省ミュージアム「情報ひろば」で行った。初めての愛知県外での出張展示である。同ミュージアムには、各地の大学の教育研究の取り組みを紹介するブースがあり、毎年展示の公募を行っている。本学として初めてそれに応募し、本写真展企画が採択された。約4か月にわたる長期間の大規模展示であったため、本プロジェクトの他、学生自主企画研究「学生によるマルチメディア広報の評価と実践」の協力も得ながら展示準備を行った。また、同ミュージアムで関連イベントとして公開シンポジウム「アクティブ・ラーニング教育の10年：愛知県立大学国際関係学科の挑戦」(2019年11月1日、文部科学省情報ひろば1階ラウンジ)を開催した。これら一連の事業は、本学の新大学誕生10周年・長久手移転20周年記念事業の一環と位置付けられた。また、東京への学生旅費に対し、愛知県立大学後援会の助成を受けた。

映像制作については、ほぼ前年度と同様の工程によって実習を進め、12名、6グループによる6作品が完成し、最終上映会を行った。

#### (2)-3 2020年度の実践内容

2020年度は、9名の受講があった。この年度は、新型コロナウイルス感染症の流行が大学教育に多大な影響をもたらした。感染症対策や授業の

オンライン転換という多くの困難に挑戦しながらの実施となった<sup>4)</sup>。

写真展は、名古屋市営地下鉄「東山公園」駅コンコースの展示コーナーを借りて実施した。例年は学生たちの自由撮影活動に委ねていたが、この年度は授業の一環として、名古屋市営東山動植物園での屋外フィールドワーク（撮影会）を企画した。夏休みに旅行がしづらく、学生が撮影をしにくい時期であったこと、オンライン授業ばかりで外出する機会が乏しかったこと、また、展示の開催地が同園の最寄りの駅であり、通行人にも楽しんでもらえる企画にしようと考えたことも理由である。撮影会も展示設営も風通しのよい所で行われた。感染症のリスクの少ない条件のもとで、展示を無事に実施することができた。例年のように、学内への移設展示も実施した。

映像制作については、やはり感染症の危険を避けつつ、Zoomでのインタビュー撮影や上映のスキルを実習に取り入れた。2020年12月頃から感染症流行状況が悪化し、1月には緊急事態宣言が出るなど、実習にとっての逆風の状況が生じた。ただし、予めオンラインでの撮影、編集指導、上映のスキルを共有していたため、苦労はあったものの、8名、4グループによる4作品が完成、Zoomによる最終上映会まで漕ぎ着けることができた。

### (3) 成果、学生の反応と今後の課題

3年度を通じて、合計37名の学生を受け入れ、ほぼ計画通りの授業が実施できた。3回の写真展では、合計311点の写真を展示し、市民のみならず楽しんでもらうとともに、初の東京出張展示により本学の広報活動の一端をも担った（表4）。映像制作では、合計36名、18グループによる18作品が完成、感染症流行で苦労した面もありながら、創作活動は完遂できた。

学生の反応の例として、国際関係学科らしい科目だとの受け止め方、自作を多くの人に見せる機会をもてることの嬉しさややりがい、撮影しながら改めて発見する身近な対象の魅力、次に紹介したいと思う被写体への関心と意欲など、さまざまな気づきにつながった様子を見て取ることができた。

今後の課題としては、感染症流行が当面続くと見られる中、いかに安全を確保し、代替手段を用意しながら、実習の目的を達成するかが引き続き問われそうである。また、動画関連技術の変化も著しい中、それらを常に

表4 2018～2020年度の写真展開催実績

年度	出展点数 出展者数(*) 撮影地の数	学外展示		学内展示	
		場所	期間	場所	期間
2018	118点 53人 31の国・地域	イオンモール 長久手「駅前棟」 1階および2階	2018年 10月30日- 11月6日	愛知県立大学 長久手キャンパス H棟地下ホール	2018年 11月20日- 12月4日
2019	141点 67人 53の国・地域	文部科学省 情報ひろば 3階企画展示室	2019年 9月2日- 12月19日		2019年 12月24日- 2020年 1月14日
2020	52点 21人 7の国・地域	名古屋市営地下鉄 「東山公園」駅 コンコース	2020年 11月3日- 11月30日		2020年 12月8日- 12月22日

学外展示は、いずれも本学地域連携センターとの共催事業として実施された。

(\*)「プロジェクト型演習」履修者以外の学科生、卒業生、教員の出展も受け入れているため、出展者の人数は履修者数を大きく上回っている。

把握して、新しい技術を取り入れることも、継続した課題である。

2020年度実施の回から、本科目が必修でなくなったことに伴い、事前に履修希望を出しながら、開講直前あるいは開講後に履修辞退するケースも多少見られるようになった。選択科目となった今も、その魅力と成果をいっそう増し、学びの継続を促していく工夫も必要であろうと考えられる。

## 2. プロジェクト(2)「他文化を知る／自文化を知る：インドネシア人介護福祉士候補者との交流」および「東海大学（台湾）とのオンライン交流と協働作業：外国人労働者の調査と意見交換」（東弘子）

### (1) 概要と目的

本章の執筆を担当する東は、2018、2019年度は、インドネシア人介護福祉士候補者との交流を（詳細は東（2019））、2020年度は台湾の東海大学で日本語を学ぶ学生とのオンライン交流による授業活動（詳細は東（2021））を実施した。いずれも本学以外の組織（教育・研修機関）と協力し、そこで学ぶ日本語学習者と、特定のテーマを軸にグループ単位で交流活動をする機会を複数回設け、日本語で発表をしたり、討論をしたりする



ものであった。そうした活動は、「インドネシア人」「台湾人」といったカテゴリーによって相手を把握する見方を脱却し個人対個人として相互理解しようとする関係を築くこと、高齢者介護の外国人材依存という社会的課題が自分とつながりのある身近なものだと捉えること、一方でそうした課題は背景や事情に細かい違いはあるものの日本だけの問題ではないと知ること、を旨指しており、本クラスは、交流の実践を通じて、異文化コミュニケーションとグローバルな社会的課題に関する理解を深めることを目的とした授業である。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、前年度から大きく内容が変更しているため、本章においては、2018、2019年度と、2020年度の二つに分けて報告する。

## (2) 2018、2019年度の活動：インドネシア人介護福祉士候補者との交流

いずれの年度も、愛知県豊田市にある AOTS（一般財団法人海外産業人材育成協会）中部事務所で研修中の EPA（経済連携協定）に基づく介護福祉士候補者（インドネシア人）と 3 回の交流活動を行った。授業内では、外国人介護士受け入れ制度やインドネシアに関する詳細な説明はせず、事前に参照すべきウェブサイトを示して、一定の予備知識を各自自主学习で得るようにした。達成すべき課題としては「相手のことをよく知り、交流活動の内容を精査するとともに、日本語学習者（中上級程度）に対してわかりやすいコミュニケーションを心がける。相手との違いを考慮することで、自分たちの文化をより深く知る。その学びの過程を報告文にまとめる。」と提示した。

各年度の活動状況は、以下の表 5 の通りである。

これら活動は、準備と交流後のふりかえりをしながら、3 か月間、同じメンバーと継続的にグループ活動をする、研修施設と大学という相互の学びの場を紹介し合う、といった特徴がある。指導としては、活動における具体的なトピックやメニューの立案について、その活動の目指す目的を考慮しながら具体的な提案ができるよう、促すことを心がけた。

3 回の交流終了後、合同発表会で他クラスの学生に向けその様子を報告し、最終課題では、各自が学びをふりかえりレポートにまとめる。そこには、相手にわかるように日本語で伝えることの難しさや、そもそも自身の大学や日本についてよく知らなかったのだという気づき、その上でどのよ

表5 2018、2019年度の活動状況

項目		年度	
		2018年	2019年
参加人数 (人)	学生	8	14
	介護福祉士候補者	16	12
活動単位となるグループ数		4	4
交流1 於：AOTS		研修施設見学 + 候補者とのグループ会話 会話トピック： 身近な観光地	会話トピック： 日本の食べ物
交流2 於：愛知県立大学		大学案内と 若者の生活に関する グループ討論	大学案内と 日本の家庭料理の 調理実習
交流3 於：AOTS		相互プレゼンテーション 学生：日本事情 / 候補者：研修で得た介護の知識	

うに工夫すればよりコミュニケーションがとれるのか少しずつ学び取っていく様子、「外国人介護人材」は、日本社会の少子高齢化の課題を救う使命だけを担っているわけではなく、外国の地で勉強しながら普通に生活する明るい同年代の若者であることを実感として知ったことなどが綴られていた。

### (3) 2020年度の活動：台湾東海大学学生とのオンライン協働学習

東海大学日本語言文化学系の学部3、4年生の学生および大学院生と、日台の外国人労働者をテーマにした協働学習を行った。当初は前年度を踏襲した計画を立てていたが、インドネシア人介護福祉士候補者の来日が見通せず、計画変更やむなしの事態となった折しも、年度内に本学での見学交流の準備をしていた東海大学の来日計画も可能性が低くなってきていた。そこで、東海大学の教員2名と協力し、本クラスの枠組みを用いて、大学生同士のオンライン協働学習に取り組むことにした。当初のシラバスや学習目標の維持も考慮に入れ、両学生混合の小グループを組み、日台双方における外国人労働者（とくに介護・福祉分野）の受け入れのあり方や考え方の違いについて調査し、意見交換をしながら発表資料を完成させる活動である。

前年度までと同様、外国人労働や台湾に関する基礎知識は、参考書籍や

表 6 2020年度の活動状況

協働活動	開催手段	開催日	活動内容
交流 1 : アイスブレイク	全員で ZOOM 会議	平日夜	全体説明と自己紹介 (グループ毎のブレイクアウトルーム)
交流 2 : 討論	グループ毎 に TEAMS 会議室	週末、平日 夜などメン バーの空い ている時間 で調整	日本の外国人労働の紹介と発 表のテーマ探し
協働作業 1 : 討論			外国人労働で比較対照する テーマの提案と決定
協働作業 2 : 討論と作業			発表資料作成
協働作業 3 : 討論と作業			発表資料作成
成果発表会	全体で ZOOM 会議	授業時間帯	録音 ppt 資料の動画による 発表と質疑応答

ウェブサイトの提示をするものの基本的には自主学習とし、授業ではオンライン交流の計画を軸に事前指導と事後のフィードバック、および発表へのアドバイスを中心に行った。参加学生数は愛県大10名、東海大9名で、両大学混合4～5名の4グループとし、それぞれがテーマを定め日台対照の発表ができるよう、調査を進めた。グループ毎の自主活動が中心となるため、授業時間はもとより、授業外でも Teams や LINE 等のオンラインツールを駆使して、両大学の教員が協力して進行状況の把握につとめ、さまざまな方向から支援し最終発表会へと導いた。発表会には、両大学から授業担当者以外の参加者もあり、学習方法や学習成果を共有する機会にもなった。

活動状況は表6の通りである。

学生の最終レポートによれば、協働作業においては、時差以上にそれぞれの生活習慣が異なり日程調整すら難しく、さらに、法的な制度や統計、社会的支援に関わる用語や概念を、一部英語を使ってはみたものの、日本語で議論するのは容易ではなかったなど、どのグループもかなり苦労していた。しかし、積極的に外国語で取り組む東海大の学生に刺激も強く受け、想像していた「楽しい異文化交流」とは異なる学びを得たという声が多くあった。

#### (4) まとめ

身近な地域に住んでいるグローバル化する社会的課題の当事者との交流や、他地域における同様の課題について外国の大学生と議論する経験は、教室内の座学だけでは得られない「心に刺さる」深い学習成果を生み出すという手応えがある。可変的な学習環境に応じて授業計画を立て、今後も参加者同士の「化学反応」が生じるのを楽しみたいと考えている。

### 3. プロジェクト(3)「あいち Ambassador プロジェクト」(宮谷敦美)

「あいち Ambassador プロジェクト (以下、観光 PBL)」は、愛知の魅力を体験できる観光プランの作成を通して、①地域の観光資源の理解【知識の獲得】、②ニーズ調査と提案方法【タスクの遂行能力向上】、③発表技術の養成【技能の獲得】を目指している。観光 PBL は筆者の長期学外研究期間であった2019年度を除き、本授業が始まった2015年度から開講している。本報告では、新型コロナウイルス感染症によりプロジェクトの実施方法を変更した2020年度の実践を中心に述べる。

観光 PBL は、地域の観光政策担当者でもある愛知県振興部観光局、愛知県政策企画局広報広聴課、名古屋国際会議場の指定管理者である名古屋観光コンベンションビューローの協力を得ており、観光施策に関する講義と中間および最終発表会でのアドバイジングを担当いただいている。また、学生の広報記事や動画等の成果物は上記の協力団体で活用されている。

#### (1) 授業内容

観光 PBL の授業内容は、前年度履修した学生の意見や協力団体との事前相談の上、改善している。2020年度は、プロジェクトのテーマ設定とプロジェクト実施内容に大きく変更を加えた。

まず、テーマ設定の変更について述べる。2018年度までは、観光 PBL は副題を「愛知のディープな魅力に迫る観光テーマの提案」としており、学生の視点から愛知の観光資源を発掘と提案することがプロジェクトの主たるタスクであった。しかし、2020年初頭から流行した新型コロナウイルス感染症の流行により、今後観光業界のありかたが大きく変化すると考えられること、また、新型コロナウイルス感染症の流行前に外国人観光客の増加から観光公害等の問題が注目され、SDGs (持続可能な開発) の観点が重視されるようになっていたことから、これらの2点をテーマ設定に

取り入れ、副題を「With コロナ & SDGs 時代の体験型観光プランの提案」とした。

次に、プロジェクト実施内容の変更について説明する。2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、10月の開講当初、学外でのフィールドワークの実施等の学習機会を確保できるかが不透明であった。その一方で、2020年5月から始まったオンライン授業により、インターネットを活用したプロジェクトの実施を比較的受け入れやすい環境にあった。そこで、この状況を活かし、YouTubeに作成した観光広報動画を投稿し、投稿動画に関するオンライン・アンケート調査をプロジェクトのタスクに加えることにした。また、2020年10月に、愛知県が「あいち観光戦略2021-2023（仮称）」を公表しパブリック・コメントを募集していたため、愛知県の観光戦略の全体像を理解するために、これを教材として活用し、提言を発信することにした<sup>5)</sup>。次頁の表7に2018年度と2020年度の授業内容を示す。

## (2) 学修成果と社会への還元

観光PBLの学修成果の発信として、2017年度から履修学生全員が作成した観光資源の紹介記事が愛知県広報広聴課の公式Facebookに掲載されている（「あいちの広報広聴」, Facebook）。また、2020年度に学生が作成した広報動画は、YouTubeチャンネル「Aichi Ambassador Project」にアップし（Aichi Ambassador Project, YouTubeチャンネル）、動画について、国内外の外国人に対してアンケート調査を行い、その分析結果を成果発表レポートにまとめ、プロジェクト協力団体に送付した。

## (3) 観光PBLでの学生の学び

最終回（第16回）の授業で、プロジェクト全体をふりかえった。2020年度に新たに取り入れた、動画作成やインターネットでアンケートを作成する方法については、学生はそれほど困難を感じておらず自ら情報収集を行っていた。一方で、動画の内容やアンケートから得た情報が学生の想定したものではなかったという失敗経験について述べる学生が多く、「プロジェクト全体の目的から見て、自分がやっている内容に筋が通っているかどうかを常に意識しなければならない」という気づきを得ていた。知識ややり方を必要に応じて学び取っていくスキルは、局所的なスキルであり、

表7 観光 PBL の授業内容

回	2018年度(履修学生数21名)	2020年度(履修学生数14名)
1	ガイダンス・チーム決定・タスク理解	ガイダンス・チーム決定・タスク理解
2	愛知県の観光資源について調べる	「あいち観光戦略2021-2023(仮称)」に関するディスカッション
3	「MICEと観光」 外部講師：名古屋国際会議場 荒川真澄氏	「With コロナ時代の観光と MICE」 講師：名古屋国際会議場 永田恵子氏
4	コンセプトのブレインストーミング・ 観光資源さがし	SDGsを取り入れた観光事例 テーマの絞り込みと、観光資源さがし
5	ターゲットとコンセプト決定	ターゲットとコンセプト決定
6	プランの大枠作成	プランの大枠作成
7	SNSを活用した広報 [技術] 効果的なプレゼンとスライド	動画・記事のストーリー作成 動画作成の注意点(録画同意書等)
8	[G作業] 中間発表準備	[技術] 効果的なプレゼンとスライド
9	中間発表	[G作業] 中間発表準備
10	[G作業] プランの見直し	中間発表
11	[G作業] プランの完成	[G作業] 動画の修正・アンケート作成
12	作成したコンテンツのピアFB	[G作業] アンケート分析
13	発表リハーサル	学科全体発表会
14	成果発表会@名古屋国際会議場	レポートピアFB、発表リハーサル
15	学科全体発表会	成果発表会@名古屋国際会議場
16	学びのふりかえり	学びのふりかえり

少しの助言さえあれば学生は十分に獲得できる。しかし、プロジェクトを達成するための各タスク(調査や動画作成など)を学生自身が設定する際に、プロジェクト全体の目的からみて適切かどうかを、その都度判断しなければならないと意識することは学生にとって非常に難しい。失敗体験は気づきを得る絶好の機会ではあるが、観光 PBL がさまざまなステークホルダーの協力を得て実施していることを考えると、「適度な失敗体験と地域への成果還元」の両立が不可欠であり、この点については今後も実践を重ねることでよりよい方法を見出していきたい。

#### 4. プロジェクト(4)「ワンピースプロジェクト(2)：県大を支える人々の魅力を発信する」(高阪香津美)

「ワンピースプロジェクト」と題した「プロジェクト型演習」を筆者はこれまで2度実施しており、未来の県大生に県大の魅力を発信することを共通のテーマとしている。本稿でとりあげる2018年度に実施した「ワンピースプロジェクト(2)：県大を支える人々の魅力を発信する」は2017年度「ワンピースプロジェクト(1)：地域の子どもたちに県大の魅力を発信する」の続編である。第1弾では、履修学生の所属学科である外国語学部国際関係学科をとりあげ、学科の学生と教員にインタビューを行い、国際関係学科の紹介を通して大学とはどのようなところか、大学で学ぶとはいかなることかを「学生目線」で伝える冊子を作成した。第2弾では、「県大の魅力」といった際、学生にスポットをあてた大学で「学ぶ」という視点だけで十分だろうか、という疑問から、大学の主役はもちろん学生であるが、あえて、大学の中で主役である学生を支える人々に着目し、彼らの仕事の内容や仕事に対する思いをポスターにし、大学で「働く」人々の視点から県大の魅力を発信することを試みた。学生は11名、成果物の作成と学内外に向けた発信までの手順は以下のとおりである。なお、本科目の目的は単に成果物の作成だけではなく、成果物の作成やその発信に向けた各ステップでは卒業論文執筆の際に求められる知識を獲得することも意識している。

- (1) 県大で働く人々の魅力が伝わる成果物のあり方、成果物作成に向けたアプローチの検討、対象者・対象部署の選択、分担決め
- (2) 研究倫理に関する学習
- (3) 対象者・対象部署に対するインタビューの依頼状作成と送付、インタビュー項目の検討、対象者・対象部署に対するインタビュー実施
- (4) 成果物（ポスター）に盛り込む内容やレイアウトに関する検討、ポスター案作成と修正、対象者・対象部署へのポスターの内容確認、ポスター完成
- (5) 第1弾：ミニオープンキャンパスでのポスター展示と振り返り
- (6) 第2弾：H棟地下通路におけるポスター展示、成果発表会の準備
- (7) 「プロジェクト型演習」合同授業成果発表会



写真1 2019年1月開催のH棟地下通路でのポスター展示の様子  
(撮影は学生)

上記手順のもと、図書館、保健室、生協、学務課、学生支援課、国際交流室、キャリア支援室、iCoToBa・グローバル実践教育推進室、研究支援・地域連携課、守衛室、清掃員、県大総務課、入試課、戦略企画・広報室、教員センター（各名称は2018年度当時のもの）の学内すべての部署の協力を得て、県大への思いの詰まった個性あふれるポスターが学生の手

によって完成した。ポスターには、各部署の業務内容、各部署のインタビュー協力者の仕事に対する思いややりがい、未来の県大生や在学生へのメッセージが記載されている。

ポスターを通して県大の魅力を学内外に発信すべく、手順(5)、(6)にあるように、2度の展示会を実施した。第1弾は2018年11月23日(金)に開催されたミニオープンキャンパスにあわせてiCoToBa（多言語学習センター）のラウンジで、第2弾は第1弾の反省から来場者を意識した展示方法に改善し、2019年1月に学内者向けにH棟の地下通路でポスター展示を行った(写真1)。いずれの会場にも任意のメッセージカードを準備した。以下は来場者から寄せられた感想の一部である。

- ・学校がすごくきれいです！働いてくれてありがとうございます！（留学生から清掃員）
- ・普段よく目にしたりお世話になっていますが、なかなか詳しいことまでは知らなかったのですが、今回のポスター発表で知れてよかったです（県大生から学務課）
- ・大学の雰囲気を知れて、勉強になりました（高校生から）

学外者には、ポスター展示を通じて大学の様子を伝えることができ、本授業の目的である県大の魅力を多少なりとも発信することができたのではないだろうか。また、ポスターによる発信は、在学生が自身を支える職員が存在や彼らが果たす役割について（再）認識したり、メッセージカードを通して、普段言えない職員への思いを伝えるなど、学内者にとっても自身の足もとを見つめなおす機会になったといえる。



最後に、本プロジェクトに参加した学生が一連の作業を通して何を学びとったのか、学生の生の声の一部を以下に記す。

- ・こんなにたくさんの方が私たちを支えてくれていることを知らなかったのでもいい機会でした。ポスターの形で成果物を作って達成感もあったし、これを通して、みなさんにも県大で働く人々の想いを伝えられたらいいです
- ・アポをとってインタビューするというカンタンな事ですが、メールの送り方、話し方、説明の仕方など、多くのことを学びました。今後、私が何か活動をする時、きつと役に立ってくれると思います！
- ・いつも、私たち学生を知らないところでサポートしてくださっていることがわかりました。また、この活動を通して、情報倫理についても学ぶことができました。これからの学生生活を県大の職員のみなさんに感謝して過ごしていきたいと思います

以上より、学生は調査を行う際の作法、研究倫理のほか、県大で働く人々の多彩な仕事内容や多くの人々の支えがあって学生生活を送っていることを(再)認識するなど、県大生である学生自身が本学で働く人々の視点を通して県大の魅力を再発見したといえる。

今回の試みを通して、教員、学生、職員という立場を越えて教育活動に関わる中で、新たな関係性や可能性が構築されたように感じられる。学内にどんな人がいて、誰がどんなことをしているのかを知るといことは、相手に対する思いやりや配慮、感謝の気持ちを生む、学内の風通しを良くする、連携体制の強化につながる、多くの気づきや発見、視野の広がりをもたらす、新たな教育・研究の可能性を広げる上で非常に重要であり、そうした意味で本活動は意義深く、筆者にとっても大きな一歩であったといえる。今回の経験を活かしつつ、新たな教育の可能性を今後も模索していきたい。

## 5. プロジェクト(5)「ライフストーリー・インタビュー」(福岡千珠)

本プロジェクトでは、2019年度にグループで「ライフストーリー・インタビュー」を実施した。人が「語る」ということ、それに耳を傾け、「語り」を共に作り上げること、さらには人を対象とした調査を行うことの意味や難しさを理解することを目的として行った。「ライフストーリー・インタビュー」とは、語り手にそれまでの人生について自由に語ってもらうインタビュー形式である。最初に投げかける質問程度はあらかじめ決めて

おくが、そのあとはどんなことが語られるか聞き手はもちろん、語り手にも予測ができないところに面白さがある。なぜ予測できないか。それは、ライフストーリーとは、語り手が作り出すものであるだけでなく、聞き手が語り手と共同で作り返すものだからだ。

授業としての「ライフストーリー・インタビュー」は、それまでに研究演習(ゼミ)の中で何度も実施済みであった。しかし、ゼミと異なり、通常の専門科目である「プロジェクト型演習」では、授業時間の延長が難しいこと、一人でも「脱落」すればプロジェクトの遂行が困難になること、学生同士が授業時間外に集まり相談する時間が取りにくいなどの問題があることが予想された。しかし、結局、教科書を変更した程度で、ほぼ変更なく一連の作業を行うことができた。

授業は、①教科書の輪読、②インタビューの準備と実施、③分析と発表という三つの過程に分けられる。ここでは、①から順を追って述べる。

授業では、まず教科書をしっかりと読むことによって、「ライフストーリー・インタビュー」を行うにあたって必要な概念や分析枠組み、調査倫理等について理解することを目指した。輪読の段階では、「インタビュー」における「語り」が「語り手」だけのものではなく、「モデル・ストーリー」や「マスター・ナラティブ」などに依拠しながら、また「聞き手」との社会的関係性の中で、相互作用によって作り上げられるものであると主張する桜井の議論を理解することを目指した。通常ゼミでは教科書として桜井厚『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』(2002)を用いているが、今回は手に入れやすさ等を考慮し桜井厚『ライフストーリー論』(2012)を用いた。しかし、内容が具体的であり全体像を把握しやすいといった点で、教科書としては『インタビューの社会学』のほうが優れているかもしれない。

輪読では、発表者が章ごとにその内容をレジюмеにまとめて発表した。また、「用語担当者」が見慣れない語や専門用語を調べ、発表した。また、発表担当者以外の参加者も毎回簡易版レジюмеを作成した。履修学生は全員が2年生であり、多くが「レジюме」をしっかりと作成したのはこの授業が初めてであったため、当初は苦戦を強いられていたようだ。

次に、授業後半に入り、実際のインタビューの準備に取り掛かった。準備として実施したのが、①「語り手」を探すこと、②「同意書」の作成、③「ライフストーリー・インタビュー」を学生同士で実際に実施してみる

こと、の三つである。①の「語り手」探しは、ときに困難を極める。ゼミで実施していた際も基本は学生たち自身が学生の家族やごく身近な人から探し始めるが、身近な人から断られると、その後非常に苦勞することがある。今回も、二つのグループのうち、一つのグループは割合すぐに「語り手」が見つけれられたが、もう一つのグループはなかなか見つからなかった。しかし、最終的に、学生の一人が、家族の協力によって、「語り手」を見つけることができた。今回の二つのグループの「語り手」は、どちらも学生たちの親世代であったが、学生の家族や親族ではない人々であった。

次に、『インタビューの社会学』のⅡ章を改めて読み、調査倫理について理解したうえで、グループごとに「同意書」を作成した。その際に、いわゆる「同意書」にみられるような固い言葉遣いではなく、自分たちの言葉に書き直すよう心がけた。

そして、実際にインタビューを行う直前に、グループ内でメンバー同士が「語り手」「聞き手」両方の立場からインタビューの「リハーサル」を行い、その際に得られた知見や感想を書きだした。「リハーサル」は、実際のインタビュー同様、機器を用いて録音し、実施する場所や時間等も吟味し、質問の仕方などもよく考えたうえで、教員抜きで行われた。「リハーサル」の報告には、「緊張した」、「難しかった」という言葉が多く見られた。しかし、後日授業内で学生たちにより詳しく聞いてみると、「深い話になった」「意外な話になりびっくりした」などというコメントも多く聞かれた。そうしたコメントからは、単にインタビューすることが難しかったのではなく、普段毎日のように授業で接しながらも、それまでの「人生」や「家族」などの個人的な事柄について聞いたり語ったりすることはほとんどなかったクラスメイトに対し、インタビューを通して通常とは大きく異なるコミュニケーションを行ったことになったことに伴う「難しさ」であることがうかがえた。自分の「人生」について語ることに伴う「不安」や「緊張」、そして語ったことがどのように受け止められるかということに関する「恐れ」。また、「聞き手」としても、自分が発した言葉や相槌が、その後の語りにもどのように影響するのか、プライベートなことが語られている際に、どこまで言葉をさしはさんでよいのかといった「迷い」があったことも述べられた。後日行われた実際のインタビューでは、「語り手」は学生の親世代であり、聞き手との関係性も非対称なものであったため、「リハーサル」において学生が感じた「語り手」の「不安」や「恐れ」とはま

た種類の異なる感情が「語り手」に生じたのではないかと推測される。しかし、事前に「リハーサル」をして、自らが「語る」こと、他者の語りに「耳を傾けること」双方の難しさを事前に少しでも実感できたのは非常に有意義であったと思われる。

実際のインタビューは、それぞれの「語り手」の都合のよい場所と時間に行われた。一方のグループでは、語り手の方が、インタビュー終了後、その場で急遽お土産を買って全員に手渡してくれたそうで、充実したインタビューとなったことがうかがえた。その後、機器に録音した「ライフストーリー・インタビュー」をグループ全員で文字起こしした。文字起こししたデータをもとに、グループごとに分析を行い、授業内で発表した。授業内の発表では、語り手の「語り」について、発表グループの解釈に対し、異なる解釈の可能性が示されるなど、充実した議論が見られた。

最後に、プロジェクト型演習における「ライフストーリー・インタビュー」の意義と課題をまとめておく。上記のように「ライフストーリー・インタビュー」を2年生の授業の一環として実施したことは、困難な部分もあったが、非常に有意義であったといえる。とりわけ、「インタビュー」は、語られた「内容」にばかり関心が向けられがちであるが、「いかに語られるか」「聞き手としていかに語りに関わるか」という点が重要であり、また「語ること」「聞くこと」双方のその難しさを実感できたことに意義があるといえよう。課題としては、授業を履修し「単位をとる」という観点からすれば、一つの単位をとるために半期で上に述べただけの作業をすることは他の授業と比べても負担が大きいことは確かであり、もう少し全体としての負担を減らすことが必要となるとともに、あらかじめ作業の流れや量を周知しておくことが重要だといえる。

## 6. プロジェクト(6)「多文化共生とコミュニティ」(佐藤良子(内田良子))

### (1) プロジェクトの目的

本プロジェクトは、「内なる国際化」が進む日本社会で文化や性差、世代、言語など異なる立場の人同士がコミュニティで共生するにはどうすればよいか考察することを目的にした。ここでは、「多文化共生とコミュニティ」というテーマを掲げ、国際交流の実践を通し、多文化共生の意義について検討した。2019年度は、大学というコミュニティに焦点を当て、多文化共生の課題やニーズ、学生や大学ができることを提案することを目標にした。

## (2) プロジェクトの概要

本プロジェクトでは、理論的な枠組みとしてソーシャルデザインを用いた。ソーシャルデザインとは、消費を活性化し、ビジネスを生み出すコマースデザインという意味ではなく、人間の持つ「創造」の力で、社会が抱える複雑な課題解決に挑む活動と定義されている(寛, 2013)。近年では、人口減少、高齢化、中心市街地の衰退といった社会課題や震災復興に取り組む現場でこの手法が取り入れられている。本プロジェクトは、授業内外の活動を組み合わせて行われた。授業ではソーシャルデザインに関する文献を輪読し、留学生との国際交流会のプログラムデザインをグループワークとして行った。一方、授業外活動では、グループが企画した国際交流会を学内の学生を対象に実施した。

## (3) プロジェクト内容とスケジュール

授業の履修者は13人で、4グループに分かれ、国際交流会を企画・実践した。国際交流会の企画は10月から取り組み、11月に参加学生を募集する広報活動を行った(写真2)。広報活動は、学生募集のチラシを作成し校内で掲示、iCoToBaで留学生に声をかけたりして広く参加を募った。国際交流会は12月に4回実施された。各交流会のテーマは、大学生が使用する若者語の紹介やスポーツ交流、知育菓子を用いた食の交流(写真3)、

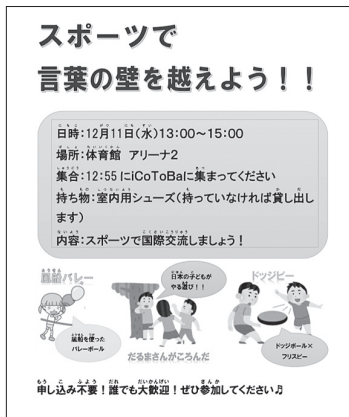


写真2 学生募集のチラシ  
「スポーツで言葉の壁を越えよう!!」



写真3 国際交流会③2019年12月18日  
「LET'S DIY! (知育菓子)」

カルタを通した漢字の紹介であった。当日の交流会は、「導入」(アイスブレーキング)、「本体」(テーマの紹介・体験)、「クロージング」(参加者へのアンケート)の3部で構成され、1時間から2時間程度行われた。企画学生は司会、進行を担当した。国際交流会に参加した留学生は19人で、国と地域はイギリス・韓国・ドイツ・中国・フランス・ポルトガル・香港・ロシアであった。日本人学生も10人の参加があり、国際交流会の参加者は留学生、日本人学生を合わせ延べ29人であった。

#### (4) プロジェクトの評価と結果

国際交流会で企画学生は参加学生にアンケートを実施した。アンケートでは、プログラム内容、異文化理解、国際交流に対する満足度、国際交流への意欲について尋ねた。

##### (4)-1 アンケート調査の方法

2019年12月4日から12月18日にかけて国際交流会に参加した学生(留学生18人、日本人学生10人)あわせて29人に質問紙調査を実施した。質問紙は国際交流会が終わった時点で配布し、その場で回収した。質問紙には学生29人が回答し回収率は100パーセント(有効回答率86パーセント)だった。回収したアンケートはExcelによる統計処理を行った。

##### (4)-2 質問紙の構成

質問紙は5項目で構成され、プログラム内容、異文化理解(文化・言語)、国際交流に対する満足度を5件法(5満足-1不満足)と自由記述で質問した。また、国際交流への意欲についても5件法(5参加したい-1参加したくない)と自由記述で回答させた。本稿では、紙面の都合上、プログラム内容に対する調査結果を分析し、他の調査結果の分析は別稿に譲る。

##### (4)-3 調査結果と分析

参加学生のプログラム内容に対する満足度の平均値( $M$ )と標準偏差( $SD$ )は表8の通りであった。

表8の結果から、参加学生は、全ての国際交流会のプログラム内容に対し満足度が高いことがわかった。特に、「1.マジで使える日本語」は参加学生の5人全員がプログラム内容に「満足した」( $M=5.00$   $SD=.00$ )と回

表8 プログラム内容に対する満足度の  
平均値 ( $M$ ) と標準偏差 ( $SD$ ) 結果

	参加学生	
	$M$	$SD$
1. マジで使える日本語	5	0
2. スポーツでことばの壁を越える	4.83	0.37
3. Let's DIY!	4.85	0.36
4. 漢字カルタで漢字に親しもう!	4.83	0.37

数値が高ければ高いほどプログラム内容の満足度が高い。

答しており、高い評価をしていた。また、自由記述には、「このような日本語に関する交流会をもっと開催してほしい。」「スラングをもっと知りたい。」という要望が参加学生からあがっていた。ここから、参加学生が日本語の授業以外でも、様々な日本語に接触することを望んでいることがわかった。

#### (5) 考察と今後の展望

本プロジェクトでは、留学生との国際交流という実践から、大学コミュニティにおける多文化共生について考察した。留学生に日本語や日本社会と接触する場を設けることができたことは高く評価したい。また、参加した日本人学生にとっても留学生との国際交流する場を提供できたことも評価できるだろう。今後の展望として、企画学生から大学コミュニティの多文化共生を促す提案がされた。まず、学生には iCoToBa の更なる活用を提案している。iCoToBa は異文化理解や日本発信のイベントが数多く提供されている。また、留学生も足繫く通っていることから、学内に国際交流の場が整えられているといえよう。にもかかわらず、学生の多くはその存在を知っているものの、参加する学生は一部だと指摘している。よって、iCoToBa への参加は、留学生とつながる場となり、そのつながりが留学生を知る一歩になると提案している。一方、大学には日本人学生と留学生が履修できる授業の開講を提案している。現在でも履修できる科目はあるものの、授業内で留学生と関わるチャンスが少ないと指摘している。双方の学生が授業で関われるような科目の開講が提案されている。

以上、本プロジェクトでは大学というコミュニティに焦点を当て、多文化共生の課題やニーズを明らかにし、学生や大学ができることを提案した。

ポストコロナの時代に、大学コミュニティの多文化共生に学生の声をどのように反映すべきか今後検討していきたい。

## 7. プロジェクト(7)「新聞記事のスクラップ」(半谷史郎)

2018年3月に退職された草野教員を引き継ぐ形で、2019年度からプロジェクト型演習で新聞スクラップの授業を担当している。

草野教員の後を継いだのは、わたし自身がかつて新聞スクラップをした経験があったことが大きい。

財団法人ラヂオプレスに勤務していた頃、社内で参考資料として作っていた新聞スクラップに大いに助けられた。ある事件がどう展開し、ほかの出来事にどのようにつながって行くかが一目で分かり、情報を整理することの大切さに気づかされた。このため、退職して大学院に入ってから、5年ほど自分でロシア関連の記事をスクラップしつづけた。

以上は20世紀の出来事だ。あれから時代は大きく変わった。インターネットのニュース速報で日々の出来事を知るのが当たり前になり、新聞を読まない人も増えている。過去の出来事もネットで多くが確認できるし、新聞記事データベースの利用も格段に容易になった。

わたし自身も、新聞は今も読んでいるが、スクラップは止めてしまって久しい。まだインターネットがさほど発達していなかった(また日々の時間の余裕も十分にあった)頃だから出来たのだろう。今もし取り組みと言われたら、やはり躊躇してしまう。

今どき新聞スクラップに取り組むのは、時代錯誤のアナクロニズムの感がある。

しかし、電卓があっても九九や筆算を習うように、新聞スクラップに取り組むことは、情報リテラシーを育む一助として意味を失ってはいない。新聞に毎日目を通し、必要な記事を選び、切り取って貼りつけて整理していく過程は、ゆっくりと、だが着実に知の基礎体力を育み、高速の促成栽培とは一味違う。またネット時代のありようの対極にあるだけに、学生にはかえって新鮮かもしれない。このように考えて、授業を引き受けた。

授業のシラバスには、次のような概要を掲げた。



情報はネットで簡単に手に入る時代ですが、消化蓄積できないまま日々が過ぎていませんか。このプロジェクトは、デジタル時代にあえて逆らってアナログな新聞スクラップをつくります。検索して分ったつもりでも消えてしまう情報ではなく、手元にスクラップという「見える」かたちで積み上がっていく、手応えある情報をつくる授業です。

授業では特に指導や方向づけはせず、とにかく新聞に目を通して関心を持った記事を切り抜いて集めるよう指示した。

学生は新聞を読む習慣がなく、この授業が初めて真剣に新聞を読んだという場合が多い。火曜5限の時間に一週間分の新聞を持ち寄ると、ひたすら読み切っていく。真面目な学生は、事前に新聞を読んで切り抜く記事の目星をつけており、授業では切り貼りの作業を済ませます。その一方で授業ではじめて新聞に目を通し、記事を選ぶ学生もちらほらいる。記事を読みふけると、一時間半では終わらないこともあり、その時は持ち帰りの宿題となる。

授業は切り貼りの手作業が中心となるため、たいていは和気藹々とした雑談の時間になる。切り抜いた記事で盛り上がる時があれば、大学の授業や家庭の日常が話題になることもある。学生にはある意味で息抜きの時間であり、教員には学生の関心や動向を知る隠れた機会にもなった。

こうして読む、切るの回を重ねるうちに、何かを集めようと思っていなくても、自然と集まってくる記事がある。これがその人の関心である。このように自分の関心が浮かびあがってくるのが新聞スクラップの醍醐味だろう。時にはわたしが口を挟み、この記事とこの記事と切ったというのはこういうことに関心があるんだねと、当人の気づいていない関心を言葉にして示してあげることもある。

この頃合いを見計らって、授業中に発表の時間を設ける。五分くらいを目安に、今どんな記事をスクラップしているか、何に関心があるのかを発表してもらおう。そして、最後は集めた新聞記事をもとにレポートを書いてもらおう。その際、テーマをさらに掘り下げたり事実確認をするために、百科事典や年鑑を見ること、また本や論文を探して読む重要さも忘れずに指導した。

参考までに過去のレポートのタイトルを一覧で紹介する（表9）。

こうして学生の選んだテーマを見てみると、当時の記憶がよみがえってくる。こうしたことがあるのが、アナログの効用だろう。

表9 過去のレポートのタイトル一覧

2019年度 (登録13名)	2020年度 (登録18名、うち2名は途中脱落)
石炭火力発電を巡る日本政府の動き あおり運転 ウーバーイーツ：自由さの陰に潜む問題 なぜ女性・女系天皇が日本で受け入れられないか SNSの功罪 日本の社会変化による求められる人材の変化 女子4回転時代の未来 女性のハラスメントに対する抗議運動について 外国人労働者を取り巻く問題点 コンビニの働き方改革について 子どもの貧困対策大綱の有効性 インターネットと子供の生活 10月～12月における香港デモの経過	新聞記事から読み解くアリババの現状 アメリカ大統領選挙2020：記事から読み解く大接戦の理由 日本の原子力発電について アメリカ大統領選挙の結果とトランプ氏の主張 フランス、「表現の自由」を巡る事件 同性愛とキリスト教 米中ハイテク覇権争い下での政権移行後の半導体に関する動向についての考察 新型コロナウイルス感染拡大と女性への影響 アメリカと中東地域の関係 原子力発電と洋上風力発電 正社員と非正規労働者間の待遇格差と非正規差別の今後 アパレル産業における余剰在庫問題に対する取り組みについて 非正規雇用者のコロナ禍での貧困悪化について タイの反体制デモ隊の主張の変化とその理由についての考察 不登校中学生への支援 脱炭素社会の実現と覇権争い

また、学生の多くは当初からこの問題に関心を持っていただけではない。新聞を読むことで問題の存在を知り、このようなレポートを書いた。ふだんの講義では教員が決めたテーマを一方的に受け取るだけだが、この授業では未知のテーマを自分で見つけ出し、レポートを書いているわけだ。アクティブ・ラーニングの一環として新聞スクラップが有用であることを示している。

なお、学生のほぼ全員が授業が終わると新聞を読むのを止めてしまっている。新聞を読む習慣を獲得するまでに至らないのが、非常に残念な点である。

## 第4節 おわりに

3年間の実施状況を振り返ると、7人の教員による7種類のプロジェクト（その一部は、年度によってコンテンツを変えながら実施されている）において、それぞれ異なる多彩な目的、技能習得、成果物の創作、社会との関わりと成果還元があったことが見て取れる。新聞やポスターといった紙を用いた従来型の作業から、Facebook や YouTube を駆使した広報・発信活動まで、多彩なスキルが駆使されている状況がある。

さらに、新型コロナウイルス感染症の影響の下、さまざまな制約を強いられる場面もあったが、オンラインの利便性を駆使した活動が展開された。Zoom や Microsoft Teams、LINE など授業のツールの選択肢に加わり、社会調査や国際交流の幅が大いに広がるという副産物をもたらした。

2020年度の履修者からは、必修科目でなくなったという大きな転換があったものの、80%以上の学生が履修する科目として定着している様子も見ることができるであろう。

社会と学術の目まぐるしい変化に対応しつつ、常に新しいスキルを取り入れ、一方で、従来型のスキルの維持、伝承もあわせて行う。このことを通じて、多様な学術の技法を今の学生たちに提示していくことを念頭に、担当者一同、同科目の継続と充実を今後とも図っていきたいと考えている。

### 謝辞

「プロジェクト型演習」の授業実践のためにお力添えをいただいた各機関、部署、団体、個人各位に感謝いたします。とりわけ、多種多様な学外活動のそれぞれの場面において、学外の関係各位のお力添えをいただきました。

### 注

- 1) 2015～2016年度の実践報告は、すでに刊行された（亀井ほか，2019）。
- 2) 2015年度は学内のみ、2016年度は県大祭の企画として展示を行ったが、学外展示を定例で開催するようになったのは2018年度からである。
- 3) 2016年6月25日～26日に、この枠組みを用いて、イオンモール常滑で写真展を開催した実績がある。今回は2回目の活用例となる。
- 4) 2020年度における感染症対策をしながらのフィールドワーク実習などの取り組みについては、別途刊行した（亀井，2021）。

- 5) 学生の意見は「意見の概要と意見に対する県の考え方」に掲載されている(愛知県ウェブサイト)。

## 文 献

- Aichi Ambassador Project (YouTube チャンネル) (2021年10月17日閲覧)  
[https://www.youtube.com/channel/UC\\_9eFQVWUSZyhkoAolmcOtw](https://www.youtube.com/channel/UC_9eFQVWUSZyhkoAolmcOtw)
- 愛知県「「あいち観光戦略2021-2023」(仮称)に対する御意見の概要と県の考え方」(2021年10月17日閲覧)  
[https://www.pref.aichi.jp/uploaded/ife/317462\\_1229512\\_misc.pdf](https://www.pref.aichi.jp/uploaded/ife/317462_1229512_misc.pdf)
- 愛知県立大学周年記念特設サイト「記念事業」(2021年10月17日閲覧)  
<https://www.aichi-pu.ac.jp/anniversary/commemorative/>
- 「あいちの広報広聴」(Facebook) (2021年10月17日閲覧)  
<https://www.facebook.com/aichikoho/>
- 東弘子. 2019. 「EPA 介護福祉士候補者と大学生の交流プロジェクト：多文化化する日本社会における人材育成の実践として」『言語教育実践イマ×ココ』7. 東京：ココ出版. 64-74.
- 東弘子. 2021. 「「どこでもドア」で PBL：台湾東海大学との協働学習」『共生の文化研究』15 (愛知県立大学多文化共生研究所) 7-12.
- 加賀美常美代. 2013. 『多文化共生論』東京：明石書店.
- 筧裕介. 2013. 『ソーシャルデザイン実践ガイド』英治出版.
- 亀井伸孝. 2021. 「感染症流行下のフィールドワーク教育：対物観察、インタビュー、写真、映像の実習と卒業論文指導の記録」(特集：新型コロナウイルス感染症流行状況におけるフィールドワーク教育：2020年度の授業実践)『共生の文化研究』(愛知県立大学多文化共生研究所) 15: 31-48.
- 亀井伸孝・宮谷敦美・東弘子・高阪香津美・松林康博・草野昭一. 2019. 「愛知県立大学国際関係学科「プロジェクト型演習」実践報告：2015～2017年度の3か年の取り組み事例」『愛知県立大学外国語学部紀要：地域研究・国際学編』(愛知県立大学外国語学部) 51: 173-199.
- 桜井厚. 2002. 『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』東京：せりか書房.
- 桜井厚. 2012. 『ライフストーリー論』東京：弘文堂.
- ドルニエイ, ゴルタン. 2006. 八島智子・竹内理監訳『外国語教育学のための質問紙調査入門：作成・実施・データ処理』東京：松柏社.
- 『文部科学広報』329 (2019年10月)：p. 19. (2021年10月17日閲覧)  
<https://www.koho2.mext.go.jp/239/html5.html#page=22>